

松田道雄研究の課題について

—高草木光一『松田道雄と「いのち」の社会主義』
(岩波書店、2018年) 批判

On Issues Regarding Studies on Matsuda Michio: How Has Takakusagi Koichi Discussed the Philosophies of Matsuda

和田 悠*

WADA, Yu

【要旨】 高草木光一『松田道雄と「いのち」の社会主義』(岩波書店、2018年)の書評論文である。高草木氏は「社会主義」をキーワードに松田の革命論、育児論、安楽死論を串刺しにしてその思想的全体像を描き出そうとした。しかしながらその思想史叙述は高草木氏の現在の問題意識によって徹底的に統制されており、精緻ではあるが静態的である。それに対して本稿では、松田道雄の思想的営為を同時代の社会の深みで動的に描き出す視点と立場を「松田道雄の社会史」と名づけ、そのためには①思想的特徴をその思想の形成・展開過程のなかで明らかにする、②運動史への視野を持つ、特に高度成長期の保育運動の経験を解き明かす、③知識人や出版文化人のネットワークを復元し、関係性の網の目のなかに思想的営為を位置づけて議論する、以上3つの課題があることを整理・確認した。

キーワード 松田道雄 高草木光一 知識人 社会史

はじめに

2018年1月、高草木光一『松田道雄と「いのち」の社会主義』が岩波書店から刊行された。刊行予告に触れてからどことなく落ち着かなかったのは、私が大学院修士課程のときから一貫して松田道雄を研究対象としてきたからである。松田についての決定的な思想史研究が世に出されるの

* 立教大学文学部教育学科

であれば、自分がこれからやる仕事はなくなってしまうのではないか。恥ずかしながらそんな焦燥の感情が湧いた。松田の主著である『私は赤ちゃん』や『育児の百科』は岩波書店から出されている。松田は「岩波文化人」と称されることも多い。その松田を主題にした著作が岩波書店から出版されることは格別の意味合いを持っている。

松田道雄（1908～1998年）は小児科の開業医をしながら、多方面にわたって言論活動を展開した戦後日本を代表する思想家であり、知識人である。松田が残した著作も膨大にある。しかしながら松田は自らの思想を体系的に提示するような思想家ではなかった。高草木氏は「愚直なまでの誠実さ」（高草木 2018：299）と松田の思索を表現しているが、同時代の社会の要請に応じて自らの視点や体験をもとに自前の思考を積み上げていくところに松田の言論活動の特徴はある。特定の理論や思想体系に依拠して何かを語るといった姿勢からはほど遠く、臨床医らしく具体的な現実から考えるプラグマチズムが松田の流儀と言えるだろう。それだけに松田の全体像を明らかにすることには固有の難しさがある。私自身、松田を研究するなかで感じてきたことである。

高草木氏はその著書を通じて松田の思想的全体像をどのように描き出したのか。そこにはどのような達成と課題があるのか。本稿では私のこれまでの松田道雄研究を踏まえて、『松田道雄と「いのち」の社会主義』を検討することにした。高草木氏が描き出す松田道雄像を批判するなかで、自らの松田道雄研究の方向性や問題視角を確かめることがここでの最終的な課題である。

1. 著者と執筆の動機について

著者の高草木光一氏（1956年～）は慶應義塾大学経済学部の教員で、社会思想史を担当している。専門は19世紀のフランス社会主義思想であるが、近年の仕事は現代日本社会史の領域で展開している。『岡村昭彦と死の思想—「いのち」を語り継ぐ場としてのホスピス』（岩波書店、2016年）は高草木氏の単著としては最初のものであり、松田道雄についての著作は2冊目である。筆致やテーマといった点で岡村を扱ったものと松田のそれには共通点が多くみられる。本書は高草木氏がこの間とりくんでいる「いのち」の思想（家）研究の環のなかにある。

高草木氏が現代日本社会史を対象にした研究を本格的に進めることになった大きなきっかけは、2001年度から2002年度にかけて慶應義塾大学経済学部に小田実が特別教授として招聘されたことにある。高草木氏と飯田裕康氏（当時は慶應義塾大学経済学部教授、前学部長）は経済学部に「現代思想」という科目を新設し、小田とともに共同で担当することになった。高草木氏は小田の追悼文で「小田実という稀有な人物と短い間とは言え濃密な時間を共有しえた」（高草木 2013：63）ことに感謝を述べている。「現代思想」を担当してからの高草木氏の仕事は、小田実の思想と時代（現代史）を掘り起し、その意義を積極的に紹介し、次の世代に伝えていこうとするところに定まった。小田実との対談や講義録を編纂する過程で、高草木氏は小田の「市民運動」の経験や「市民」の思想に多くを学ぶことになったと言えるだろう。

小田実とは松田道雄とベ平連時代に交友関係があった。松田の訃報に際して小田は『京都新聞』の取材に答えて、「社会主義思想、左翼運動全盛の時代に、情況に流されることなく自由な発想を貫いた人物。ベ平連の時代は、すでに高齢だったこともあり、街頭に出るよりも思想家としての活躍が大きかった。反権力意識が強く、当時その存在は非常に重かった。氏の自宅をうかがったこと、医師として診察してもらったこともあるが、個人としてというよりも、時代を共有し公

につきあった「同志」という思いの方が、より強い』（『京都新聞』1998：6.3）と述べている。ここからは小田の松田への深い信頼を読み取ることができる。小田の影響を強く受けている高草木氏が松田に対しても好意的な関心を抱いたとしてもおかしくない。

他方で、「現代思想」の開講時点から高草木氏は「生命科学」「生命倫理」「いのち」といった問題への研究的関心を持っていた。「現代思想」は小田実との対論という形式を取っており、多彩なゲストスピーカーが招聘されたが、そのなかに高草木氏の意向で選ばれた脳神経外科医の山口研一郎氏の姿があった。山口氏は「現代医療を考える会」代表で、脳死・臓器移植に反対する立場を鮮明にしている。

19世紀の「社会主義」の研究者として出発し、小田実の個性や「市民」の思想に魅せられ、他方で「いのち」への研究的関心を抱いていた高草木氏にとって、マルクス主義への深い理解と関心を晩年まで持ち続け、安楽死の問題にも積極的に発言した小児科医で、小田と並んで戦後日本に「市民」の思想を打ち立てた松田道雄は格好の考察対象であったと言えるだろう。

高草木氏は本書の根本的な性格について「はじめに」のなかで、「大学院修士課程のときから一九世紀フランス社会主義思想を研究対象としてきた私の「社会主義」への思いを、松田道雄の葛藤に重ね合わせている点において、本書は私自身の過ぎ来し方を振り返るセンチメンタル・ジャーニーの意味をもっている。なぜ、私は社会主義に引きつけられたのか。なぜ、私はその社会主義に憎悪を抱いたのか。そして、私はほんとうに社会主義の実現を諦めたのか。払っても払っても棘のように突き刺さってくる自己への問いに対して、私は松田道雄を対象とすることで、かろうじて正面から向き合うことができた」（高草木 2018：xii～xiii）と宣言している。

この点で本書は松田道雄に仮託して高草木氏の思想が存分に語られる「思想論」という性格を強く持っている。本書の題名にある「「いのち」の社会主義」にかかわって、高草木氏は本書の「おわりに」で、「「社会主義」をめぐる葛藤を新しい「いのち」の思想への葛藤へと架橋すること、すなわち「いのち」の社会主義とでも言うべき新しい思考のあり方へと展望を切り拓くこと」（高草木 2018：299）の課題を松田は自らに課していたと述べているが、ここには19世紀社会主義研究から「尊厳死」をめぐる生命倫理へと研究的関心を深化させていった高草木氏の思想的課題の変遷が表明されていると見た方がいいだろう。

2. 本書の方法—「社会主義」という観点

本書の構成は以下のとおりである。

はじめに

序章 松田道雄と社会主義

第Ⅰ部 「市民」概念と社会主義

第1章 ベ平連と社会主義

第2章 「市民」概念の多様性

第3章 マルクスとレーニンのあいだ

第Ⅱ部 育児書のなかの「市民」

第4章 思想書としての『育児の百科』

第5章 集団保育の発見

第6章 ルソーをめぐる葛藤
第Ⅲ部 社会主義と「いのち」
第7章 安楽死と社会主義
第8章 女と「いのち」
おわりに
参考文献
人名索引

本書の最大の特徴は「社会主義」という観点を導入することで、松田の思想的全体像を描き出そうとするところにある。

高草木氏も言うように、松田は「社会主義」への関心を晩年まで保っていた。だが、多岐にわたる自らの仕事を「社会主義」という言葉で統一的に把握し、体系的に整理して展開したわけではない。松田の生前最後の著作『安楽に死にたい』（岩波書店、1997年）の末尾には、松田が1986年に執筆した論文「市民的自由としての生死の問題—老人問題のコペルニクスの転換」が採録されており、その最後には「「近代的自我」は文学だけの問題ではない。ある時点で死をえらぶ決断をせまられることのある市民の厳粛な選択をふくむものである」（松田 1997：132）とある。一般に松田道雄と言えば、「戦後民主主義」の旗手であり、「市民的自由」の思想を核にした「近代主義」、「市民主義」者として認識されている。

それに対して高草木氏は、「松田道雄と社会主義」という切り口で松田の人生と思想を焦点化しようとする。そのねらいはどこにあるのか。つまりは本書における「社会主義」という観点が嚮導するものは何か。私なりに整理すると2つある。

本書の構成に明らかなように、高草木氏は第Ⅰ部では主に松田の革命論を、第Ⅱ部では育児論を、第Ⅲ部では安楽死論をあつかっている。それぞれの領域で松田の思想的営為は展開されているわけだが、高草木氏は「社会主義」という観点を導入することでそれらを横に串刺しにして、そこに共通する問題意識や思想的核心を明るみにする。革命論と育児論と安楽死論の発想と論理の根にあるのは「社会主義」という松田の問題意識である。そう仮定することで、高草木氏は松田のそれぞれの領域における思想的営為のあいだの断層や矛盾に着目するよりも、それらを統一的に理解し、首尾一貫した説明をあたえようとしている。育児論も、安楽死論も結局のところ松田にとっては「社会主義」の問題であったとの議論が展開される。

もうひとつ、高草木氏の採用する「社会主義」という観点には、「近代」を批判するないし資本主義を内在的に止揚するという意味が込められている。「社会主義」という観点から松田の思想的営為を捉えかえすとは、松田の思想的営為に「近代」と「現代」に両側面を見出そうとする、あるいはまた「近代」と「現代」の過渡期的な位置に松田の思想的営為を置いて、その意味や意義を考えることに等しい。「社会主義」において近代化と民主化とは統一的に追求されたわけではない。個人の価値を尊重する「民主主義」という点では「社会主義」に不十分な点があり、「社会主義」からすれば個人主義的な主体性の確立に収束してしまうような「民主主義」には欠落がある（吉田 1984, 吉田 1993）。こうした「社会主義と民主主義」という問題設定から高草木氏は松田の思想的営為を評定しようとする。

以上の指摘をふまえると、高草木氏が「はじめに」のなかで述べている「社会主義への思いが

アンビヴァレントである以上、松田のなかでその社会主義とつながっているルソーも、育児も、安楽死も、安定的な位置を与えられることなく、耐えず揺れ動き続ける。松田の思考全体が、決して「古き良き民主主義者」という枠組みのなかに収まるのではなく、「人生の教師」のような自信に満ちた風貌の裏側には、自己批判に揺れ動く葛藤があった。そう考えれば、松田は時代の精神と格闘した思想家として俄かに屹立してくる」（高草木 2018：xii）とのくぐりが高草木氏の松田への接近視角を明瞭に示すものであることがわかるだろう。

3. 本書が提示しえた松田道雄像

高草木氏が同書で紡ぎ出した松田道雄像とは何か。高草木氏は思想家としての松田の特徴について以下の2つを指摘して結論としている。ひとつはアイザiah・バーリン (Isaiah Berlin 1909～97年) に匹敵する思想家であり、もうひとつは「いのち」の思想家であるというものである。この指摘は本書に固有のものである。以下では高草木氏の議論の展開を見ておきたい。

1) アイザiah・バーリンに匹敵する思想家として

バーリンは自由の概念について、「積極的自由（～への自由）」と「消極的自由（～からの自由）」の2つに分けて論じている。「積極的自由」とは、「自己支配としての自由」であり、これには自己を律する「自律」と、集団によって集団を律する「自治」の意味がある。「消極的自由」とは、「～からの自由」、すなわち強制からの自由であり、これには他者の干渉からの自由と、自己の内なる強制状態（押さえがたい衝動や、自由を享受する能力の不足）からの自由という意味がある。バーリンは2つの自由の概念のうち「消極的自由」のほうを積極的に擁護した。特定の理念に従って自己を律し、理想的な自己実現を目指すような「積極的自由」の思想は、自己実現を理由として個人に特定の理念を強要するパターンリズムを許し、個人を意思決定する存在として認めないことにつながり、歴史的にみても全体主義や社会主義の政体における「集団支配の自由」を正当化するものへと転化する危険を伴ってきたからである（橋本 2010）。

高草木氏は、バーリンの「消極的自由」を擁護し、「パターンリズム」を批判する思想的営為に寄せて松田のそれを意味づけようとする。実際にアイザiah・バーリン、ラミン・ジャハンベグロ『ある思想家の回想—アイザiah・バーリンとの対話』（みすず書房、1993年）を松田が熱心に読み、そのパターンリズム批判に共鳴していた事実を熊本学園大学「松田道雄文庫」の自筆の書き込みからも裏付けている（高草木 2018：244-248）。

松田によるパターンリズム批判の思想的営為は集団保育と安楽死の領域で展開された。

まずは集団保育。松田が参加していた1960年代の保育運動ではマカレンコの集団主義教育論が集団保育を正当化する理論として強い影響力をもっていた。松田はそれにパターンリズムを見出して批判的であった。マカレンコの集団主義教育論を相対化するのに松田が依拠したのがルソーの幼児教育論であった。ルソーの教育観には「自発的・積極的な従順」を教育と考えるような「マカレンコの要素」ともいべきものがある。この点は松田自身もルソー研究を深めていく過程で認識を新たに、ルソーとマカレンコを単純に対比的にあつかうことに無理があることを認識していたはずだと高草木氏は言う。とはいえ松田はあくまでもルソーの『孤独な散歩者の夢想』に着目し、そこにルソーの思想的真髓を見出そうとする、バーリンが言うところの「消極的

自由」を支持する思想家としてのルソーを強く打ち出し、それを高く評価したのである（高草木 2018：207-210）。

パターンリズム批判を前提にして、「インフォームド・コンセント」の概念は登場する。高草木氏は松田の『療養の設計』（岩波新書、1955年）を取りあげ、「インフォームド・コンセント」の概念が登場する以前に患者主体の療養のあり方を提起したことを当時の先端を行っていたと一方で高く評価する（高草木 2018：10-13）。他方で、患者にとって「良い医者」でありたいという「良心」を捉え返し、医者としての主観性を反省することは難しかったのではないかと述べている（高草木 2018：248-253）。本書ではこのような松田の医療・医学認識の振幅は、「安楽死」をめぐる思想的営為のなかで検証される。松田は晩年になってようやく医者としてのパターンリズムを拒否する場所に立つものの、バーリンのようにはその思想的立場を体系的に打ち出すことはできなかったというのが結論である（高草木 2018：247）。

さらにパターンリズムの批判から「市民運動」論へと議論は展開する。高草木氏は小田実の「市民運動」の基本認識について、「前衛」概念は、党が絶対的な正しさをもち無謬性の高みにいることを示しているが、市民運動は、つねに誤りを犯しうる「人間」の行為であることが強調されている、「どんなに腐敗したデモクラシーであろうとも、意思決定の契機を大衆がもつかぎりにおいて、優れた独裁制よりはよい」というものであったと指摘する。そしてこのような正統的マルクス主義との対抗で打ち出される「無謬性からの解放」という論点の提起は、1960年代の市民運動の思想的特徴でもあり、松田の思想的営為にもこうした性格が濃厚にあると論じている。（高草木 2018：239-243）。

2) 「いのち」の思想家として

高草木氏が描出したもう一つの松田の思想家像は、「ニヒリズム」について独自の視点から解釈した「いのち」の思想家というものである。高草木氏によれば、1957年にレニングラードを訪問しソ連の現状に失望したところから、思想家・松田の独自の歩みが始まる。翌年に松田はソ連から帰国して間もない内村剛介に出会い、ソ連の現状、全体主義についての認識を深めていく。こうしたなかで松田は自らの思想を「ニヒリズム」に定めていくという。

「ニヒリズム」の思想的内実は何か。高草木氏は1973年に松田が執筆した「私のニヒリズム」から、「一切はむなしきもので、確実なのは、かりそめの命だけだ。人間はもろい存在なのだから、お互いに、このもろいものを大事にし会いましょう、というので連帯が出てくるのだと思う」、「すべての人間が、平等の立場で、過去にこだわらないで、いまの世界をうまくやっていくにはどうすればいいかということに、早く同意を見つけなければならぬ」という箇所を引用した上で、「ニヒリズム」とは「いのち」の思想に他ならない」と指摘する（高草木 2018：292-293）。

高草木氏の言う「いのち」の思想については、この問題について高草木氏と共同研究を行っている安藤泰至氏の「いのちへの問いやその自覚を根本契機として含んでいるような思想、そうした問いやその自覚によって自己や世界についてのある新しい見方が展開されているような思想」（安藤 2011：2）との定義をあたえて差し支えないだろう。

また、高草木氏は松田が「いのち」の思想を「女」の問題にすりかえてしまったとの批判を本書で展開する。性別役割分業を梃子に男を公的領域、女を私的領域に振り分ける力学を、つまりは近代の公私二元論を捉え返すことのできない自由主義者としての松田の限界を描き出す（高草木

2018 : 289)。他方で松田の思想的営為に同一化し、そこから積極的に意味を引き出そうとする高草木氏は、松田にとって「女」は一つの隠喩であり、それに託していたのは「徹底して「新しい」思想」であったのだと擁護もする。その「新しい思想」とは、「[弱者の救済]というナロードニキ的、あるいは社会主義的視点、「あわれみの情」というルソーの視点」の上に築かれうるかもしれない」(高草木 2018 : 289) という。

かくして高草木氏は、「いのち」の平等性を基礎にした「もろい存在」(「受苦者」)による社会連帯の思想として「ニヒリズム」に端を発する松田の「いのち」の思想を把握し、その思想的営為が有するアクチュアリティを読者に手渡そうとする。

4. 高草木氏の限界

これまで見てきたように高草木氏の本書における達成は、「社会主義」という観点を導入することで松田の革命論、育児論、安楽死論を一望し、それらに見られる発想と論理の共通性、共振性を明らかにすることで松田の思想の一貫性を破綻なく説明したことにもとめることができる。

だが、こうした松田の思惟様式に照準を合わせるような論じ方では、松田が「現場の思想家」であったことの意味や意義が見えなくなってしまうのではないだろうか。高草木氏もいうように、「松田は、医師としてつねに「いのち」の現場にいた。診療医をリタイアした後も、その思考は生々しい現場の感覚を離れることはなかった」(高草木 2018 : 298)。それだけに松田の発言は状況的であり、その思想的営為を見渡してみると矛盾する点も少なくない。また、松田は積極的な言論活動によって社会を啓蒙(教育)しようとした知識人であり、高草木氏が取り上げる『育児の百科』(岩波書店、1967年)は高度成長による社会の構造転換に応答しようとする小児科医の松田の主体的な実践という性格を強く持っている。思惟様式を取り出すのに社会という次元を括弧に入れてしまっただけでは松田の思想的営為の性格は見えてこないのではないだろうか。

高草木氏は、「社会主義」という観点、あるいはまたアイザイア・バーリンの思想を媒介させることで、「最新の学識に基づいて的確なアドバイスを送る頼れる医師、やさしい語り口で日常生活と世界史とを結びつけてみせる博覧強記の知識人、近代合理主義で手際よく問題を整理する賢人といった印象とは裏腹に、松田の思想的営為は逡巡と諦念に揺れる泥臭いものだった」(高草木 2018 : 299) とその思想的営為の陰影を浮き彫りにしたことを本書の達成とする。だが、本書全体から受ける印象は松田の思想的営為の一貫性なり統一性であって、「泥臭さ」よりも「偉大な思想家」という像である。

言い換えれば、平易なことばによる思索という意味では理解しやすいものの、その全体像を描こうとすると一筋縄ではいかない「矛盾せる思想家」という点で固有の理解しがたさを有している松田道雄の思想をあまりにも本書は明晰に整理しすぎている嫌いがある。それには、松田による回想と同時代の批評や発言を峻別せずに、自らの問題関心にしたがって組織化し、つなげて理解や解釈する本書の作法が大きく関わっているように思われる。結果として松田を「偉大な思想家」として描き出すことになるのは、もっぱら現在の地点から松田の思想的営為に意味を付与しようとする著者の主観性と結びついているのではないか。そうした主観性の強さが松田の思想的営為を歴史的に検証するという問題意識や感覚を見失わせてしまうのではないだろうか。高草木氏は本書の方法と叙述を「センチメンタル・ジャーニー」として正当化しているが、帯文にある

「新しい思想を希求し続けた一人の20世紀知識人の精神的評伝」として見た場合には問題含みの松田道雄への態度であると言えないだろうか。

5. 「松田道雄の社会史」に向けて

松田の「精神的評伝」を書くためにはその思想的営為を20世紀の歴史、その文化と社会のなかで捉え返す視点と方法が必要である。松田の思想的営為における矛盾や限界をつかまえて、松田は同時代社会のなかにあって何が見えていて、何が見えていなかったのかを批判的に考察することもまた松田を歴史的に理解することなのであり、現在にあって過去の思想家の意味を過剰に求める現在主義的な思想家論によっては、松田の声を歴史のなかから聴くことができず、その思想的営為から私たちは深く学ぶことができなくなってしまう。

端的に言えば、私の松田道雄研究の課題はその思想的営為を同時代の社会の深みのなかで歴史化することにある。その作業をさしあたり「松田道雄の社会史」と名づけておきたい。以下ではこれまでの私の研究成果を踏まえながら、その作業に必要な視角や方法について整理、確認しておきたい。

(1) 思想の形成・展開過程

本書が「センチメンタル・ジャーニー」であることの所以とも言えるが、本書の問題点は松田道雄という歴史的人物の思想をあつかうのに時間軸が設定されず、時代性とのかわり方でその思想的特質が明らかにされない点にある。その結果として松田の思想的営為は陰影なく超時代的に語られ、一般化された水準でその意味が析出されてしまう。

戦後日本の知識人を論じる場合にはやはり「世代」という視角は欠かすことはできないのではないだろうか。

松本礼二は近代日本の知識人を「大正教養主義ないしオールド・リベラリスト世代」「一九〇〇—マルクス主義の世代」「戦後啓蒙の世代」の3つの世代に区分して論じている。「戦後啓蒙の世代」の知識人については、「戦前からジャーナリズムで活躍していた清水幾太郎を最年長とし、多くは戦前戦中には自己の学問や文学の世界に沈潜し、戦後一斉に言論活動を開始していわゆる戦後啓蒙を担った知識人」で、「専門的学問世界では「大正教養主義」世代の学者たちの弟子に当り、その自由主義をも継承しているが、同時にアカデミズムの外で展開されたマルクス主義者の学問的業績、講座派や労農派の日本資本主義分析に深く影響され、これを自分の学問に生かしている」(松本 1997:17) との規定をあたえている。

松本は必ずしも松田を視野に入れて論じているわけではないが、「戦後啓蒙の世代」の知識人としての特徴は松田にも当てはまる。

松田は小児科医で京都帝国大学教授だった平井毓太郎(1865～1945年)に師事をしていたし、自伝的評伝である『私の読んだ本』(岩波新書、1971年)からは松田が1920年代から30年代にかけてマルクス主義の文献を渉猟していたことがわかる。

松田といえば自由診療をつらぬいた「町医者」のイメージが強い。『町医者の戦後』(岩波書店、1988年)というブックレットも刊行している。だが、松田は結核を専門とする医者として総力戦体制のなかで有機的な位置を占めながら戦前・戦中に医学の学問的認識を更新し、その成果を社

会に問うてきた。最初の著作である『結核』は1940年に弘文堂から刊行され、1943年には「小児の慢性肺結核の発生に関する研究」により医学博士の学位を授与されている(和田 2008)。松田道雄の小児結核研究は、武谷三男の技術論や大塚久雄等の比較経済学、丸山眞男の日本政治思想史研究と並べて検討する必要がある、そこには共通した精神的態度を見いだすこともできるかもしれない。

高草木氏が述べているように松田が医者としてのパターンリズムを晩年まで拒否しきれなかったとすればそれはなぜなのか。その理由の一端は松田の医学・医療思想の形成・展開過程を明らかにするなかで見えてくるのではないか。松田自身は総力戦に医者として動員されて、その体制を末端であっても担った体験を戦後にどのような総括をしたのか。松田の戦争観の分析も合わせての検討課題であろう。

ところで、高草木氏は「松田道雄は、闘いの人ではなかった。デモの先頭に立ったり、街頭でアジ演説を行なったりすることはおそらくなかった。若い頃は、医師として精力的に動きまわったし、文弱の徒というわけではなかったが、書齋に籠もって執筆活動をしている姿が似合う人だった」(高草木 2018: 21)と形容している。たしかに松田は党員活動家ではなかった。だが、1920年代後半から30年代にかけて周縁的な場所ではあるが共産主義運動や無産者医療運動に関係していた。党への献金も欠かさなかったという。松田の「社会主義」への関心は自らが体験した共産主義運動とは何であったのかを自らに対してははっきりさせたいという主体的な契機が濃厚にあった。また、戦前に特高警察に逮捕された経歴があることは松田を語る上で逸することのできない事件であり、松田の「市民的自由」への熱い思いは「政治的窒息」の空間を体験したこと抜きには語れないこともここでは強調しておきたい(和田 2008)。

(2) 運動史への視野

松田道雄を社会との接点で歴史化して論じる上で、松田の1960年代の保育運動とのかかわりを明らかにすることは決定的に重要であると私は考えている。

高草木氏は本書の「はじめに」で、「血縁と地縁で結ばれた「共同体」から解放された近代的諸個人が、互いに自律的な存在として、他者とのあいだにどのような新しい関係性をとり結ぶことができるか。幾多の思想家が取り組んできた世界史的な思想的諸課題がここで語られている。しかし、松田はここで歴史哲学を開陳しようとしているわけではなく、あくまで『育児の百科』の著者たる小児科医の立場からこの議論を展開している。かつては母親を通して連綿として継承されてきた「しきたり」としての育児を、核家族化という近代的現象のなかでどのように新しく組み立てていくのか、という自身の終生の課題がここには織り込まれている」(x～xi頁、傍点は引用者)と述べている。「しきたり」としての育児が「母親を通して連綿として継承されてきた」点については判断を留保したいが、ここには松田の終生の課題が高草木氏によって適確に捉えられていると思う。

松田は小児科医として高度成長を体験するなかで、子育てという営みが決して自明のものではなくなったことを認識する。都市化が急速に進むなかで地縁血縁が薄くなり、子どもを育てるという営みが社会から絶縁した母子密着の孤独で閉塞的なものになっていくことに子どもの成長発達危機を見て取った。そして松田が期待をかけたのが保育所における集団保育であった。松田にとって保育所は何よりも子どもの成長発達を豊かに保障する「共同性」の場であり、高度成長

を体験した日本社会にあっては「働く母」のみならず「専業主婦」にとっても必要な場所であると考えられていた。そうした問題意識から松田は1960年代の保育運動にかかわっていた。同時代の男性保育学関係者がジョン・ボウルヴィの「愛着理論」に依拠し、乳児保育に否定的であったなかで、松田は会長をつとめていた関西保育問題研究会での保母（保育士）とのディスカッションを通じて乳児保育の実際に学び、その正当性を運動内部のみならず新聞や雑誌、ラジオなどのメディアで広く社会に向けて発信した（和田 2011）。

しかしながら、1960年代の保育運動のなかの松田については高草木氏もそうであるがこれまでの研究では蓋然的にのみ触れられてきた。

それには、松田自身が自らの保育運動の経験を清算主義的に総括していることが大きい。自伝的評伝である『私の読んだ本』は松田の全体像を知る上で重要な文献である。だが、その刊行は1971年であり、松田が保育運動から事実上の喧嘩別れをして間もない頃であった。『私の読んだ本』を読むと1960年代の保育運動団体は日本共産党の大衆団体であり、党による引き回しによって果たすべき役割を十全に担うことができなくなったように読めてしまう。樺山（1986）は松田に関する早い時期の評伝的エッセイであるが、松田にとって保育運動とのかかわりは意味のないものと断言している。

現在では戦後日本の保育運動は組織的な民主的運動というイメージが強く、人びとの自発的な参加によって創造された市民運動であるとは考えられていないだろう。しかしながら、1960年代の保育運動についてはその前半と後半では位相が異なり、それこそ松田道雄が会長であったことに象徴されるように、運動の出発時点においては「無党無派」の市民運動的な要素は運動のなかに一定程度あったのであり、松田はそうした方向性を運動のなかで堅持しようとしていた。またそのために1960年代後半になると葛藤や軋轢もまた抱え込むことになったといえる（和田 2017）。

松田の保育思想・哲学を論じる上でよく論じられるのは『育児の百科』である。たとえば、天野（2006）や河合（2015）は同書に見られる松田の読者（母親）への語り方や向き合い方に注目する。子ども一人ひとりには個性があり、子育てには決まった型があるわけでもない。それだけに子育てにおいて試行錯誤することは当然であり、価値あることである。こうした松田の哲学やことばが、密室のなかで母子が向かい合い、完璧な子育てを目指し、ノイローゼに陥ってしまう主婦の育児ストレスや育児不安を解消する役割や機能を担っていたことが指摘される。

たしかに『育児の百科』は松田の著書である。同時代の「専業主婦」に熱心に読まれたことも間違いない。だが、『育児の百科』の特徴は集団保育についても学齢に応じた詳しい説明がなされていることにもある。初版には1958年から大阪市ではいち早く乳児保育に取り組んだ私立北田辺保育園や、後に斎藤公子の名前とともに「さくら・さくらんぼ保育」として広く知られる埼玉県深谷市の私立さくら保育園のリズムや遊びの写真が掲載されている。『育児の百科』には松田の保育運動の経験が反映されており、同時代の保母（保育士）によってもまた熱心に読まれていた。

このこと自体が興味深い論点であるが、松田はウーマン・リブに対しては「男尊女卑にたいしてたたかう熱意はみとめますが、建設的な見通しがなく、局所的な反逆に終わってしまうのは残念です」（松田 1979:79）と冷淡に見ていた。主婦化規範の構築過程のなかで集団保育論を展開していった松田であるが、「主婦」性を問い直すようなウーマン・リブの発想と論理を十分に受け止めることはできなかったのである。1970年代後半以降は管理社会の解放区として家庭を捉え

返し、「専業主婦」こそが解放された人間であるとの議論に傾斜していく。それでもなお松田は「専業主婦」と「働く母」の両方を視野に収めて評論活動を行っていたのであり、保育の社会化を否定する発言を公の場ですることはなかった。

つまりは、松田の育児・保育思想と高度成長を結びつける際に都市新中間層の「専業主婦」にだけ注目するのは一面的である。高度成長は女性の主婦化とともに雇用労働者化が進展し、両者がせめぎあっていた時代である。このような同時代の社会空間のなかに松田の育児・保育に関する思想と行動を位置づけて、その意味や射程を明らかにすることが必要である。

さらに議論を進めたい。保育運動のなかの松田が論じられてこなかったのは、松田によって書かれたテキストをもっぱら素材にして論じてきたからである。したがって松田が保育運動をどのように見てきたのか、松田の保育運動についての認識が問題にされてきた。その結果、松田の保育運動に関する否定的な印象がクローズアップされ、松田の保育運動とのかかわりが持っていた豊かさや可能性が見逃されてきた。

保育運動の側から松田はどのように見られていたのか。保育運動のなかの松田を論じるには、同時代の保育運動の一次史料にあたり松田の痕跡をたどることが課題となる。保育運動史研究への視野が必要となってくる。

先述したように松田は関西保育問題研究会の会長として同時代の保母（保育士）と保育実践を介して交流し、集団保育論を彫琢していった。こうした展開は高度成長期の「民間学」とも形容できるだろう。その過程で啓蒙的「知識人」である松田は「民衆」である保母（保育士）といかなる関係性を構築したのか。そこにあったズレや葛藤にも目を凝らした相互行為の歴史的実態を史料や元保母（保育士）への聞き取りを通じて復元し、検討する「出会いの社会史」もまた試みられる必要があるだろう。

松田と保育運動とのかかわりで忘れてはならないのが、1960年代の大阪府枚方市香里団地における保育所づくり運動、学童保育所づくり運動に実際に関与していた事実である。運動の中心となったのは香里ヶ丘文化会議という市民運動体であり、京都大学人文科学研究所の教員であった多田道太郎が初代の代表であった。松田と多田は京都の知識人サークルで知己であったことから松田は香里団地に足を運ぶようになった。運動の結果、公立の香里団地保育所が開設、0歳児からの乳児保育も行なわれた。松田は保育所に出向いて保母（保育士）を相手に乳児保育の実際的な指導をしている（和田2010, 和田2012）。

高草木氏は松田の「市民」概念について「自由思想の主婦」を形象化したものとして捉え、「市民運動」観についてはアナーキズムの志向性をそこに読み取っている（高草木2018:33-42, 62-70）。もちろんそうした指摘は間違っていないが一側面であって、松田の「市民」「市民運動」観を考える上では、香里ヶ丘文化会議の市民運動の経験や1971年に創刊された雑誌『市民』の主要な論客で松田があった事実などを考慮に入れる必要があるだろう。雑誌『市民』では久野収がポジティブな市民的公共性を説いていた（篠原2004:119-125）。松田自身は「市民的公共性」という言葉を使うことはなかったが、香里ヶ丘文化会議の市民運動は市民による「市民的公共性」の創造というべき経験であり、松田はそれに伴走していたのである。

運動史へと視野を広げていくと、松田のこぼれ思想が運動のなかでどのように受けとめられ、新しい現実を切り拓くための武器たりえたのかが見えてくる。松田の思想が受容される局面を考察することは松田の思想的営為を社会のなかで捉え返す「松田道雄の社会史」にふさわしい

作業といえるだろう。

(3) 知識人・出版文化人のネットワーク

「松田道雄の社会史」といった場合には松田を取り巻いていたネットワークや人間関係を明らかにしていくことが必要である。

高草木氏の場合には松田の思惟様式を問題にしていることから、本書で松田と並べられて語られる多くの人物とその思想は、松田の思想的限界や欠如を浮かび上がらせるべく二項対立的に論じられてしまう。たとえば、松田が障害者や障害児保育に深い理解を示すことなく、小児科医として近代医療・医学思想の枠にとどまり、「健康」や「治療」といった常識的な概念を反省することができなかった点では毛利子来や原田正純の思索が引き合いに出される（高草木 2018:134-138,194-197）。人間関係をともなう思想の継承関係や相互規定的な関係が本書で論じられることはない。

そもそも松田は膨大な著作を残しえたのは、松田が知識人や出版文化人とのネットワークに囲まれていたことを意味している。

知識人のネットワークという点では桑原武夫をリーダーとする京都大学人文科学研究所をめぐる人間関係や松田も参加していた共同研究の共同性、富士正晴、多田道太郎、鶴見俊輔といった「自由主義」者との人間的交流、京都ベ平連とのかわりなどを整理しておく必要があるだろう。

松田の有した出版文化人ネットワークにも注目すべきであろう。松田はミニコミからマスコミまで、身辺雑記的なエッセイから革命思想史論までさまざまなメディアに登場し、あらゆることを論じてきた。高度成長期にはラジオに頻繁に登場し、育児や家庭について評論活動を行ない、後日それらの内容がまとめられ書籍として刊行される場合も少なくなかった。これまで私はメディア知識人としての松田についてそれほど考えてこなかった。しかしながら、松田が戦後日本にあたえた思想的影響力の大きさはメディアの力に依るところは大きい。松田が発したことばについても、松田がいかなる場所で、どのような文脈でのものなのか。レトリックにも十分に留意し、松田の思想的営為の意図と意味を考察することが肝要である。高度成長期の文化状況、読書状況のなかで「高度成長期に愛された本」（藤井 2009）を執筆しえた著者としての松田が社会史としては問われなくてはならないのだと考える。

おわりに

本稿は高草木光一『松田道雄と「いのち」の社会主義』を批評するなかで、私の松田道雄研究の視角や方法をあらためて確認する作業であった。本書を読み終えて最初に抱いたのは既視感と違和感であった。それらを自らに明らかにするべく書評論文という仕方でも高草木氏の松田道雄像に向き合うことを本稿では試みた。

既視感が高草木氏が本書について、先行研究とのかかわりを無視したことにかかわっている。それほど多くはないが、本書が参考文献として挙げているように松田道雄に関する研究や議論はこれまで一定程度存在する。それらとの関係で本書が位置づけられておらず、本書の叙述に先行研究の成果がはめ込まれてしまっているために本書に独自の新しい論点が見出し難かった。松田の安楽死論に関しても大谷（2006）が既に論じている。

違和感は本論で詳述したように高草木氏の方法にかかわっている。高草木の松田道雄論は著者の現在の問題意識が過去に投影されるような「思想論」とでもいうべき性格を持っている。松田の諸領域での思索を統一的に論じ、全体像を描き出そうとする意欲的な研究のスタンスに強く共感するものの、それがどうしても現在からの一方的な意味付与という意味では「解釈の暴力」(岡野 2002: 第4章) であるように思えてならなかった。

私とはいえば、松田の主観性やその主体に内在する発想や論理に沿って、対象とする時代や社会を読み取ろうとする社会的な思想史研究の方向に進みたいと考えている。それが松田の思想に根ざし、松田の思想を超えることになるからである。そして最終的には、高草木氏が力強く成し遂げたように自らの手で松田の思想的全体像を描き切ることがなされなければならない。そう強く決意するものである。

引用文献

- 天野正子, 2006, 「松田道雄 育児の百科」岩崎稔・上野千鶴子・成田龍一編『戦後思想の名著50』平凡社, 328-337.
- 安藤泰至, 2011, 「いのちへの問い いのちからの問い—序にかえて」同編『「いのちの思想」を掘り起こす—生命倫理の再生に向けて』岩波書店.
- 大谷いづみ, 2006, 「市民的自由」としての死の選択—松田道雄の「死の自己決定」論』『思想』981, 101-118.
- 岡野八代, 2002, 『法の政治学—法と正義とフェミニズム』青土社.
- 樺山紘一, 1986, 「松田道雄論」三谷太一郎編『言論は日本を動かす5 社会を教育する』講談社, 275-303.
- 河合蘭, 2015, 「松田道雄—母親たちとともに」栗原彬編『ひとびとの精神史3 60年安保—1960年前後』岩波書店, 314-341.
- 高草木光一, 2013, 「小田実氏と「現代思想」」藤原書店編集部編『われわれの小田実』藤原書店, 57-63.
- 高草木光一, 2018, 『松田道雄と「いのち」の社会主義』岩波書店.
- 篠原一, 2004, 『市民の政治学—討議デモクラシーとは何か』岩波書店.
- 橋本努, 2010, 『自由の社会学』NTT出版.
- 藤井淑禎, 2009, 『高度成長期に愛された本たち』岩波書店.
- 松田道雄, 1997, 『安楽に死にたい』岩波書店.
- 松田道雄, 1979, 『女と自由と愛』岩波書店.
- 松本礼二, 1997, 「知識人の時代と日本」『思想』872, 11-32.
- 吉田俊傑, 1984, 『戦後思想論』青木書店.
- 吉田俊傑, 1993, 『近代日本の知識人』大月書店.
- 和田悠, 2008, 「松田道雄における転向と戦争経験—戦後民主主義の歴史的契機として」渡辺秀樹・有末賢編『多文化多世代交差世界における市民意識の形成』慶應義塾大学出版会, 211-236.
- 和田悠, 2010, 「1960年代の保育所づくり運動のなかのジェンダー」『歴史評論』722, 48-63.
- 和田悠, 2011, 「松田道雄と集団保育の〈発見〉—1960年代の保育運動のなかで」大門正克ほか編『高度成長の時代3 成長と冷戦への問い』大月書店, 203-235.
- 和田悠, 2012, 「香里ヶ丘文化会議による地域社会づくり—1960年代前半の団地における「市民」と市民運動」『社会文化研究』15, 63-88.
- 和田悠, 2017, 「松田道雄の保育問題研究運動論—1960年代の『季刊保育問題研究』にみる」『立教大学教育学科教育研究年報』60, 105-120.

